愛鳥活動からの里山保全活動

愛知県 岡崎市立 生平（おいだいら）小学校
6年　内田 翔梧　杉田 久弥
平山 理沙　前原 葵衣

巣箱の設置

学校紹介

本校は岡崎市のほぼ中央部に位置する、全校児童76名の小規模校です。学区には里山や清流があり、自然環境が豊かです。その自然環境を活用して、昭和57年から全校児童で愛鳥活動を軸にした環境保全活動に取組んでいます。巣箱の架設や、給餌台の設置などの活動により、野鳥を保護し、地域の山林を守り育ててきました。平成22年からは、学区に「蛍流の森」が整備されたことに伴い、里山整備の活動を愛鳥活動に取り入れています。

学校の裏山

活動場所

活動場所は、学校の裏山、裏山遊歩道、蛍流の森の３か所です。

学校の裏山は、昭和53年に児童とPTAにより、「小鳥の森」と「緑の教室」として整備されました。裏山遊歩道は、平成14年にPTAが主になり、地域の方から山林を借用する形で整備されました。学校の裏山と裏山遊歩道は校地と隣接しています。

「蛍流の森」は、平成22年に岡崎市が遊歩道として整備し、地域の団体「ロックエンゼル」がその後の管理を行っています。蛍流の森は、学校から５００m程の距離にあります。

「蛍流の森」

環境保全意識を高める間伐

サミットに参加してみて…
今後の夢・希望・活動計画

本校の愛鳥活動を軸にした環境保全活動も、24年度で30周年を迎えました。親子2代 に渡って愛鳥活動に取組んでいる、という家庭も多くなっています。そこで、愛鳥活動を40年、50年と継続し、親子三代で愛鳥活動に取組んでいる家庭が出てくるようにしたいと考えています。

そして、子どもたちに自然との共生感覚を身につけさせると共に、地域住民の環境保全の意識を高め、「環境保全の生平地区」と呼ばれるようにしたいと考えています。

親子で愛鳥活動

愛鳥活動からの里山保全活動

愛知県岡崎市立生平（おいだいら）小学校

６年　内田翔梧　　杉田久弥　　平山理紗　　前原葵衣

○学校の紹介

私たちの生平小学校は、徳川家康の生まれ故郷である岡崎市にある、全校児童７６名の学校です。学校周辺や学区の自然環境を活用して、昭和５３年から学校林での愛鳥活動に取り組んでいます。

○愛鳥活動場所の歴史

昭和５３年に学校の裏山を整備して「小鳥の森」と「緑の教室」を作り、野鳥の保護のために巣箱をかけたり給餌台を設置したりしました。平成１５年には、地域の方から山林を借りて「裏山遊歩道」を整備しました。平成２２年には、生平小学校の近くの荒れた山林が里山として整備され、「蛍流の森」と名づけられました。これらを愛鳥活動の場所として活用しています。

〈小鳥の森　巣箱かけ〉

○里山保全につながる愛鳥活動

野鳥観察：３１年間継続して学校周辺の野鳥を観察しています。
ツバメの営巣調査：２５年間、データの蓄積と分析をしています。
巣箱の架設：野鳥を繁殖させ食物連鎖のバランスを保っています。
給餌活動：自然餌が乏しくなる冬季に餌やりを行っています。
植樹：野鳥が好む実のなる樹木を植え、種を運搬させることで樹木を増やしています。
間伐：育ちの悪い木や増えすぎた竹を切ることで、下草を増やし、野鳥の餌となる虫の住みよい環境を作っています。
発表会：保護者や地域住民にも公開して開催し、環境保全活動の輪を広めています。
発信：愛知県野生生物保護実績発表大会、矢作川環境技術研究会などで情報発信と他校との情報交換を行っています。

〈裏山遊歩道　間伐〉

〈公開発表会〉

○今後の活動への思い

お父さんやお母さんが小学生だった頃から、生平小学校では愛鳥活動をして、環境保全に取り組んできました。間伐を行ってみて、自然環境は簡単には良くはならないと学びました。ふるさと生平の自然を守る活動のバトンを後輩に引き継いでいきます。

森林環境教育の実践について

1．これまでの実践の成果（実践の効果や子どもの成長、今後の期待など）

・これまで３０年間行われている愛鳥活動を活動の軸にすることで、子どもたちが意欲を持って里山保全活動に取組むことができている。探鳥会などの愛鳥活動によって培われている自然を観察する姿から、自然に働きかけていこうとする姿への変容が、少しずつ見てとれる。自然はそこにあるものという感覚から、自然環境は変えていけるものであり、人間が良くしていかなければならないものという感覚にかわってきている。

・子どもたちが自然環境、里山保全に興味を持つようになっている。一方で、日常的に自らの暮らす地域で里山保全活動に参加しようとする子どもはまだいない。授業や学校行事、子供会などの活動には意欲的に参加するので、自ら地域のために活動できる子どもを育てていきたい。

・自分たちがやって終わりではなく、「受け継いでいきたい」という願いを、子どもたちが自ら持つことができた。

2．実践の課題（苦労したことや困ったことなど）

・間伐などには専門的な知識や技術が必要であるが、それを教員がきちんと見につけているわけではないため、外部講師を頼む必要があった。

・学校の裏山遊歩道や「蛍流の森」は学校の敷地ではないため、活動をするために許可を得る必要があった。

・間伐にはヘルメットやのこぎり、剪定バサミなどの道具が必要であった。

3．課題への対応（工夫したことや課題の解決策など）

・外部講師の必要性

⇒ 岡崎市役所環境保全課に連絡をとり、その時々の学校の希望に合うような講師を紹介してもらった。

⇒ 地域の環境保全団体（ロックエンゼルの会）の活動に教師が定期的に参加することで、蛍流の森での活動への協力をいただいた。

・許可の必要性

⇒ 校長先生に土地の所有者に書状を書いていただき、許可を得て活動した。

・道具

⇒ 地域の里山保全団体（ロックエンゼルの会）から必要な物品を貸していただいた。

4．その他（今後の計画や方向、抱負や希望など）

・今後の方向性としては、５年生の活動の中心を愛鳥活動を軸にした里山保全活動にしていきたい。間伐などを生平小学校の活動の一つとして定着させ、５年時に学級全体で環境保全活動をしていくことで、６年時に各自が野鳥や自然環境に対する課題を持って個人追求できるようにしていきたい。

・２０年後、子どもたちがふるさと生平に戻って来て、ふるさと生平をより住みやすいふるさとにしてくれることに期待している。

愛知県 岡崎市立 生平（おいだいら）小学校

「ぼくらの里山再生活動」
～ふるさと秦梨の自然再発見～

愛知県 岡崎市立 秦梨（はだなし）小学校
6年　谷石 慶則　鈴木 花歩

学校紹介

秦梨小学校は、明治6年に開校し130年余りの歴史があります。学区の南北に乙川（おとがわ）が流れ、緑豊かな自然に恵まれた地域です。

各学年１学級という小さな学校ですが、みんな仲よく生活していることが自慢です。地域のみなさんもとても協力的で、学校行事には多くの方が参加してくださいます。学校林活動には「山の先生」、学校田活動には「田の先生」を地域の方に委嘱し、指導していただいています。

活動場所

本校の周りには、「にこにこ山」と名付けた学校林、「ふるさトープ」と名付けた池、学校田、学校の前を流れる乙川があり、自然とふれあい、学ぶことができる場所がたくさんあります。

平成11年度から継続して「里山再生活動」や「ビオトープ活動」に取組んでいます。生きものを観察したり、自分たちで手入れをしたりすることで、自然の不思議やおもしろさ、人と自然のつながり、共に生きることの大切さを学んでいます。

サミットに参加してみて…
今後の夢・希望・活動計画

「里山再生活動」や「ビオトープ活動」を通して、子どもたち自身が環境を主題にした追究を深めています。自分たちの学びを多くの人に発表し、理解していただく機会がもてることで、子どもたちの自信も深まりました。今後は、人との交流もしながら、多面的に見たり、考えたりすることができる子どもになってほしいと思います。こうした取組によって「ふるさと秦梨」を愛し、郷土に誇りのもてる子どもたちが育っていくと考えています。

「ぼくらの里山再生活動」
～ ふるさと秦梨の自然再発見 ～

学校名　愛知県岡崎市立秦梨小学校
発表者　６年　谷石慶則　鈴木花歩

１．ぼくらの秦梨小学校

私たちの学校は愛知県の中央、岡崎市の中央の中山間地にあります。全校児童は６６名です。放課には、学年や男女の関係なく、みんなで仲よく遊んでいます。学区の里山にはササユリが咲き、ゲンジボタルが飛翔しています。私たちのおじいさんやおばあさんたちの多くは、田んぼや畑の仕事、乙川の水を動力源にした繊維加工に従事してくらしてきました。最近は、自動車関連産業で働く人が多くなり、お年寄りが田畑の耕作をするだけで、里山まで手が入らないという状態になってきました。

２．秦梨小学校のビオトープ

秦梨小学校は、平成１１年から、ビオトープ活動に取り組んできました。「ビオトープ」とは、「地域の野生の生きものが、自然のままでくらせる場所」という意味です。学校の周りには、学校林（にこにこ山）、学校池（ふるさトープ）、学校田など、自然とふれあい、学ぶことのできる場所があります。私たちは、これらの場所を以前のような里山にすることを「里山再生活動」と名づけ、生きものを観察したり、自分たちで手入れをしたりすることで、自然の不思議さやおもしろさ、人と自然のつながり、共に生きることの大切さなどを、体験しながら学んでいます。全国学校関係緑化コンクール特選、全国学校ビオトープ・コンクール環境大臣賞をいただきました。今年は、岡崎城南ロータリークラブから表彰していただきました。全国から視察に見える方があり、４月には、ヘリコプターから撮影した写真を新聞に掲載していただきました。

３．里山再生活動

学校林「にこにこ山」で里山再生活動として、下草刈り、灌木や竹の伐採などを行う「里山レスキュー活動」、枝打ちやシイタケのほだ木の切り出し、図工作品の材料探しなどをする「山仕事の会」、シイタケの菌打ち、竹ぼうきづくりなどを学ぶ「感謝の会」を行っています。冬には、「にこにこ山」の樹木を利用して、炭焼きを行なっています。４年生は学校の前の乙川やふるさトープで水を中心とした環境調査をしています。５年生は学校田で、ほとんど農薬を使わないでもち米づくりをしています。山の仕事は山の先生、田の仕事は田の先生をお願いし、長明クラブ（地区老人会）の方からも知恵や技を教えていただきながら、取り組んでいます。昨年は、森林組合の方から枝打ちロボットの実演も見せていただき、植林地の手入れの必要性も学びました。

４．他の教科や領域との関連

１年生と２年生は生活科の授業で、３年生から６年生までは、総合的な学習の時間を中心に、このビオトープを利用して、自然と人との関わりについて学んでいます。炭焼きの体験は理科の勉強、「にこにこ山」で見つけた材料で図工の作品づくりなど、他の教科の勉強とも関係させて学んでいます。

５．活動を通じて学んだことや気がついたこと

自然のすばらしさ、偉大さなどを感じました。太陽の恵み、水の恵み、動植物の恵みなど、自然から多くのものを得て、私たちは暮らしているということを改めて感じました。また、山や田の先生からは、里山で暮らしている人々は、自然にあるものをじょうずに活用して、食べたり、道具として利用したりという技や知恵をもっているということを学びました。こうして、自然と人間が仲良くしてくらしていくということはとても大事なことだと思います。

森林環境教育の実践について

1．これまでの実践の成果（実践の効果や子どもの成長、今後の期待など）

・子どもたちが自然とふれあいながら、学校田や学校林での体験活動などを行うことによって、自然に対する見方に広がりがでてきている。道端に咲いている草花や、飛来している昆虫などにも目が向き、自然の移り変わりから、季節を実感する子どもが多くなってきている。
・小学生の頃の自然の中での体験活動、自然の恵みを生かした人々の暮らしを学ぶ活動が、環境保護、人間の知恵や考え方の基になるように、必ず生きて働く力となっていくと信じている。

2．実践の課題（苦労したことや困ったことなど）

・保護者の世代は、里山の荒廃が進む高度成長期に成長してきたため、子どもたちが両親から里山を有効に利用して暮らす知恵や技を学ぶ機会が少ない。
・学校教育活動の中では、限られた時間でしか体験活動等を行うことができないため、十分な時間を確保することが難しい。
・森林環境などにかかわる知識や経験のない教職員がほとんどのため、教職員自身が興味を持ち自ら進んで学んでいく必要がある。

3．課題への対応（工夫したことや課題の解決策など）

・里山で暮らしてきた祖父母の世代の方々にお力をお借りし、子どもたちに、自然とかかわりながら暮らすことのすばらしさや大切さを学ぶ機会を設けてきた。このことを、保護者の世代にも広げていくために、授業参観やＰＴＡの活動などでも、自然とふれあう体験活動を取り入れるように努めてきた。
・体験活動のねらいをはっきりさせ、６年間を見通して、それぞれの学年で取組むことを焦点化し、教科・領域との関連をもたせながら展開している。
・子どもたちの学びの足跡を記録し、次の実践につながるように努めている。

4．その他（今後の計画や方向、抱負や希望など）

・ビオトープ活動、里山再生活動も本校の伝統として継続され定着している。しかし、何年も継続していることで、活動が形骸化している面もある。子どもたちに伝えたいことをはっきりさせ、現代社会での暮らしともかかわらせながら、子どもたち自身が課題を見つけ、見通しをもって学びを進めることができるようにしていきたい。
・本校の取組は、人としての見方や考え方の基になるものであると信じている。幼い頃の、五感を通した体験が、環境保全や人としていかに生きるべきか を考えるときに役立つと思う。今後とも、多くの方の支えを得ながら、取組を進めていきたいと考えている。

愛知県 岡崎市立 秦梨（はだなし）小学校